

天草版伊曾保物語と熊本方言の関係について ——発音の変化を探る研究——

About the relationship between the
EsoponoFabvlas and the Kumamoto dialect:
Study to investigate a change of the pronunciation

城 重幸

Shigeyuki Jyo

はじめに

熊本人同士の会話は、荒っぽくてまるで喧嘩しているようだとよく言われる。これは、熊本人の発音に起因するものであると考える。発音は、時代とともに変化しているが、それでも、熊本方言には変化せずに使われ続けている発音があることには気付いていた。しかしながら、何故使い続けられているのかを解明する手段が無かった。ところが、2019年3月15日に、国立国語研究所から大英博物館所蔵の天草版伊曾保物語（Esopono Fabvlas）が対訳的に日本語表記され、国語研究用テキストとして公開された。この天草版伊曾保物語は、1593年にイエズス会天草学林（現・熊本県天草市）にて刊行されたポルトガル式ローマ字綴の日本語イソップ物語である。

これは、当時の口語体で書かれていることから、室町時代の話し言葉、とりわけ熊本で使われていた発音を知ることのできる日本語研究上の貴重な資料である。

そこで、このデータベース化された天草版伊曾保物語に使われている発音と現在熊本で使われている発音とを比較することにより、発音の変化を探ることとした。

研究の方法

仮説

- 仮説1 日本語の発音は、室町期までは多様であったが、次第に単純化していった。
- 仮説2 日常生活と深く関わる発音は、熊本方言と言う形で根強く残った。

調査研究の方法

国立国語研究所がデータベース化した天草版伊曾保物語に使われている全ての語を抽出し、その語の中から現在の発音とは違うと思われる語をポルトガル語の発音ができる J・C 氏 (ALT で来熊し、熊本に定住) に、当時の発音を再生してもらった。

次に、熊本生まれで熊本育ちの高齢者の N・R 氏、O・T 氏、S・S 氏、M・K 氏 (いずれも 65 歳～70 歳) に、現在の熊本でその発音を聞き取れるか、以前使っている人がいたか、現在も使っているかを、聞き取りにより使用状況を確認した。

結果と考察

天草版伊曾保物語に使用されている品詞別の語数

名詞 1,372 語 (エソホ等の固有名詞は除く)、動詞 762、形容詞 92、形容動詞 52、代名詞 34、助詞 43、助動詞 25、副詞 95、接続詞 16、連体詞 3、感嘆詞 5、疑問詞 3、接頭・接尾語 7、連語 1 の計 2,511 語である。(初出の語のみを数えた)

古語の動詞下二段活用の使用

本物語には、現在の動詞下一段活用が、以下のように下二段活用で使われている。

(以降、該当する発音の部分には、アンダーラインを付して表記し、必要に応じてポルトガル式ローマ字も添えて表記する。)

現在の「～える」を「～ゆる」の使用例 = 教ゆる、栄ゆる、弁ゆる、与ゆる、衰ゆる、訴ゆる、植ゆる、蓄ゆる、見ゆる、添ゆる、加ゆる、従ゆる、悔ゆる、用ゆる、聞こゆる

現在の「～ける、げる」を「～くる、ぐる」の使用例 = 受くる、見付くる、掛くる、負くる、上ぐる、逃ぐる、過ぐる、遂ぐる

現在の「～める」を「～むる」の使用例 = 進むる、責むる、求むる、恨むる、勤むる、埋むる、改むる、収むる

現在の「～てる、ちる」を「～つる」の使用例 = 育つる、企つる、当つる、果つる、捨つる、落つる

現在の「～べる、びる」を「～ぶる」の使用例 = 述ぶる、減ぶる、詫ぶる

現在の「～れる」を「～るる」の使用例 = 入るる、忘るる、暮るる

現在の「～ねる」を「～ぬる」の使用例 = 尋ぬる

現在の「～せる、じる」を「～する、ずる」の使用例 = 任する、働かする、損ずる、判ずる、存ずる、生ずる

ここで、「教ゆる」を代表例として考察すると、本物語には、「人に教ゆる、道を教ゆる」等と表記している。この「教ゆる」は、現在の「教える」であるが、少なくとも四百数十年前の熊本では、「教ゆる」と発音していたのである。

この「教ゆる」は、室町時代以前には、『源氏物語』¹⁾の常夏に「御琴教へ奉り給ふにさへ」や『古今和歌集』²⁾の春に「花散らす風のやどりは誰か知る我に教へよ行きてうらみむ 素性法師」のように下二段活用で広く使われていたのである。

従って、高校の古典学習では、「教ゆる」は、ヤ行下二段活用の動詞で、現代の「教える」[ア行下二段活用の動詞]と同じで、「教ゆる」は古語であると教えているのである。

この古語として教えられている「教ゆる」を、熊本では今でも「オシユッ」、「オシユル」と発音して日常的に使っているのである。

念のため、この下二段活用の動詞「教ゆる」等について、先の4人に確認したところ、「今でも日常会話では、ついその発音が口をついて出てくる。」と答えてくれた。

このように、現在の熊本でも、室町時代ころに使っていた「下二段活用」の発音をしっかりと使っているのである。

この発音が残った要因としては、熊本人は「オシユッ」のように語尾をはっきり発音しないことやこの発音が熊本人に浸透していたことで日常会話の中で根強く使い続けられていたからであると言える。

ka「カ」やga「ガ」への単音化

本物語には、現在ならka「カ」と発音するところをqua「クワ」と拗音で表記している語が、quafō果報、quan棺、quabun過分、quantai緩怠、quaixo会所、quabocu花木、quagon過言、quaixen回船、zaiqua罪科、yquan衣冠、qenqua喧嘩、xōquan賞翫、fanquai参会、miōqua猛火、cōquai後悔、faiquai徘徊、の16語あり、いずれも、二重母音の漢語（当時は外来語）由来の語である。

一方、ca「カ」と直音で表記している語は、cannin堪忍、caiyeqi改易、caxxen合戦、cacugo覚悟、caixō海上、cānbiō看病、canyō肝要、caifen海辺、xeccan折檻、faican才幹、daicai大海、fuacacu不覚、xiccai悉皆、cocca国家、gonca言下、の15語が単音や呉音の漢語で、以下、caqi柿、cauo顔、cado門、cane金、cai貝、carafu烏、camo鴨、cairu蛙、camome鷗、came亀、cani蟹、caua川、cague影、caxira頭、cata肩、cazu数、cabane屍、cata方、cai甲斐、catçu勝つ、canoxixi鹿、caqemono賭け物、canaximu悲しむ、cacayaqu輝く、caite掻いて、caxicoxi賢し、catajiqenaqere忝けれ、cacayete抱えて、cagami屈み、tacara宝、cazzura葛、cano xujinかの主人、carugayuyeniかるが故に、caxiconiかしこに、cataru語る、cayeri帰り、cayete変えて、canauaide適わいで、canarazu必ず、carū軽う、cayerimijde顧みいで、cayerarete返られて、cauaita交わいた、canauanu適わぬ、catçute嘗て、camifama上様、cauō買わう、cacotçuqe託け、caqemeguru駆け巡る、cacureta隠れた、carai辛い、cazari飾り、camaye構え、cacaxe掻かせ、carugue軽気、catame片目、cate糧、cariūdo狩人、catague担げ、caxicomatta畏まった、cami嘯み、fumica住处、inaca田舎、chicai近い、naca中、naça仲、xica鹿、vōcame狼、sacana肴、iroca色香、aca赤、fadaca裸、face墓、mizzucafa水嵩、mimigicaqi耳近き、firacaruru開かるる、xicamo然も、tairaca平らか、icani如何に、vocare置かれ、caqeō掛けう、vocafanu犯さぬ、arecaxi有れかし、yocarō良からう、

foca 他、vomomucaru 赴かる、icatte 怒って、tocacu 兎角、ficare 引かれ、fucasu 賺す、vacazacari 若盛り、の101の和語である。

これらの用例から、明らかに今でも日本で使われている「カ」については、室町期以前には、qua「クワ」とca「カ」とを使い分けていたことがわかるのである。

また、濁音のgua「グワ」とga「ガ」についても同様で、gua「グワ」と表記している語は、guanrai 元来、yeigua 栄華、の漢語2語である。

一方、ga「ガ」と表記している語は、monogatari 物語、fugata 姿、yugami 歪み、foregaxi 某、vaga 我が、ategauō あてがわう、togame 咎め、tagaini 互いに、agari 上がり、magai 紛い、firugayeite 翻いて、qegaru 汚る、cogaru 小軽い、yagate 纏て、cogane 黄金、figacoto 僻事、toga 科、nogareta 逃れた、togatta 尖った、agame 崇め、magatta 曲がった、qeōgatta 興がった、yubigane 指金、vaqimayegatai 弁え難い、nifanganichi 二三箇日、cuxigaqi 串柿、cogatana 小刀、curogane 鉄、yamagaua 山川、yamagatu 山賤、の30語の和語と gacuxa 学者、ganjeqi 岩石、gaman 我慢、gan 雁、gai 害、xogai 生涯、cugai 公界、の7語の漢語で、計の37語である。この漢語の場合、元々が単音のものと同様に日本語として定着していたものである。

結論として、和語にはga「ガ」を使用していて、前述のqua「クワ」とca「カ」の関係と同様の傾向を示している。

以上のことから、今から四百数十年前の室町期ころには、qua「クワ」とca「カ」、gua「グワ」とga「ガ」とを明確に使い分けていたことが分かったのである。

この「クワ」と「カ」の使い分けについて、ネイティブな熊本の高齢者は、今でも、家事は「カジ (kaji)」、火事は「クワジ (kwaji)」、舵は「カヂ／カディ (kadji/kadi)」と使い分けて発音しているのである。

この「家事、火事、舵」のような同音異義の語は、熊本は平板アクセントであることから区別するために拗音「クワ」と直音「カ」とを使い分け続けたのである。しかしながら、このような特別の語以外は、日本全体が直音していったのと同様に直音化していったのである。

ここで、先の4人にこの発音を確認したところ、2人は「自分自身若いころ、家事と火事を区別して発音していた。」と答え、後2人は、「自分は使い分けてはいないけれども、高齢者が火事と家事の発音を区別し、それぞれ「クワジ」と「カジ」と日常会話の中で使い分けていたことを知っているが、近年では、同じ熊本の人間でも使い分けることも出来なくなっている。」と答えてくれた。

ところで、この拗音について元熊本大学教授・秋山正次氏は『熊本の方言』³⁾で、『火事を「クワジ」、左官を「サクワン」、外国を「グワイコク」について、万葉時代以降に当時の都で使われるようになっていた外来語で、漢字の輸入に伴ってその発音が入って来たものである。』と述べている。

また、文化庁のホームページ 国語施策情報>第5期国語審議会>語形の「ゆれ」について (部会報告) [第2部会審議報告の別冊]⁴⁾の第2部 発音の「ゆれ」についての2で、『「カシ」と「クワシ」(菓子)、「ガイコク」と「グワイコク」(外国) - いわゆる唇(しん)音退化によるクワ行拗(よう)音の直音化の現象である。国語の「クワ・グワ」の音は、今日では、東京その他全国的に広く

「カ・ガ」と発音されるが、九州・四国をはじめ、各地方に「クワ・グワ」の音を保存している所もある。』と、昭和30年代には九州地方では、拗音が使われていたと記している。

つまり、秋山氏の論文や文化庁のホームページ、さらには高齢者への聞き取りから、熊本人がかつて使い分けていたこの発音が、四百年ほど使い続けられていたが、五十年程ほど前から徐々に使われなくなっていったことが分かったのである。

この四百年以上にわたって使われていた拗音を使わなくなった要因は、ラジオやテレビ等の言語メディア、それに学校教育（標準語化政策）、さらに東京等の中心部との人流の影響によるものであると考えられる。それに、「クワ」と「グワ」の「カ」と「ガ」への直音化は、拗音より直音の方が発音しやすいことにもよるものである。

ところで、熊本市中央区に「くわみず」という地名がある。「神水」と書く。この地は、水前寺公園と江津湖に挟まれたところで、阿蘇山や九州連山の伏流水が湧き出るところで、昔の人は、ここを神の水が湧き出すところで神水（クワミミズ）と言っていたが、複雑な発音を避け、発音しやすいように拗音の「ワ」を「ワ」と直音化し、重なった「ミ」の重なりを省いて「クワミズ」というようになったのである。

このように、地名までもが、拗音の直音化を証明しているのである。

「シェ」と「セ」の使い分け

この物語では、50音の直音のサ (fa) 行と拗音のシャ (xa) 行を区別して使い分けている。その語を抽出して、ポルトガル語が話せる J・C 氏に発音してもらった。

結果は、以下の通りである。

「シャ (xa)」と発音 = xacumot 借物、rôxa 牢舎。

「サ (fa)」と発音 = fato 里、fabaqi 捌き、fatemo 扱も、fafayaqi 囁き、xofa 所作、faiuai 幸い、fama 様、faxi 差し、faican 才幹、afa 朝。

「シ (xi)」と発音 = xijte 強いて、xigueru 茂る、xidai 四大、xita 舌、xinjit 真実、xicamo 然も、xicararu 叱らる、jixxi 実子、mexixyoxe 召し寄せ、yaxinai 養い、vouoxi 多し、voxiye 教え、jucuxi 熟柿、qexiqi 気色、tçuxxinde 慎んで、curuxicaruru 苦しがる、yuruxi 許し、xocuxi 食し。

「シュ (xu)」と発音 = xucurö 宿老、xutrai 出来せうず、xujin 主人、rioxucu 旅宿、ayaxüde 怪しゅうで、iyaxü 卑しゅう。

「ス (fu)」と発音 = fugata 姿、möfu 申す、fucoxi 少し、furu する、fugui 過ぎ、fudeni 既に。

「シェ (xe)」と発音 = xe 背、xerarexi しえられし、xenu しえぬ、xemete しえめて、xenzacu 穿鑿、xoxen 所詮、vöxe 仰しえ。

「シヨ (xo)」と発音 = xötocu 生得、xocuxi 食し、xoxen 所詮、xöquan 賞翫、xözuru せうずる、xogai 生涯、xojü 所従、xofa 所作、mixö 未生、maraxözuru まらせうずる、fiacuxö 百姓、coxö 小姓、gacuxö 学匠、naixö 内証、taxö 多少。

「ソ (fo 又は so)」と発音 = söjite 総じて、sono その、foba 側、fononaca その中、foroyete 揃えて、

fɔra 空、fɔregaxi 某、と発音してくれた。

この発音を整理すると、直音のサ行は、「サ ○ ス ○ ソ」となり、拗音のシャ行は、「シャ シ シュ シェ ショ」となる。当時の熊本では、サ行の「シ」と「セ」はなく、シャ行の「シ(xi)」と「セ(xe)」であったのである。

このことから、少なくとも四百数十年前の熊本では、明らかに拗音のシャ行と直音のサ行とを区別して発音していたと言えるのである。

そして、このシャ行の「シェ」が、つい数十年前まで、「先生」を「シェンシェイ」、「しなっせ(しなさい)」を「シナッシェ」のように熊本では言い続けられていたのである。

昭和44年、筆者は新任教師として天草の牛深市(現・天草市牛深)の牛深小学校に赴任した。その時、「シェンシェイ」と児童や保護者たちに、いきなり声を掛けられて、戸惑ってしまった思い出がある。勿論、児童に限らず、「シェンシェイ」や「～シナッシェ」のように「セ」を「シェ」と言う牛深市民に多く出会ったのである。その後も、特に天草地方や有明海沿岸でこの発音に、多く出会った。

そこで、この「シェ」について、先の4人に尋ねたところ、M・K氏以外は、「熊本の高齢者は、つい数年前までは、『セ』とは言わずに『シェ』と発音していたが、今の60歳代以下の熊本人はほとんど使っていない。」とのことであった。

この「シェ」の発音のように、発音は余程のことが無い限り簡単には変わらないものではあるが、変らせる要因としては、学校教育や言語メディア、それに人の交流に依るものであると考えられる。

「エ」を「イ」と発音

本物語には、蠅(はえ)を fai(はい)、蛙(かえる)を cairu(かいる)と表記している。蠅を「はい」、蛙を「かいる」と言うことについては、二重母音[ae]が[ai]に変化する現象である。

このことについて、今でも、熊本人は蠅を「はい」というが、「蛙」については、「かえる」がほとんどで「かいる」と発音する年配者には稀に遭遇するくらいである。

このことについて、先の4人は、「蠅は『はい』と、蛙は『かえる』と使っている。」と答えてくれた。ただし、表記する場合は、「『はえ』、『かえる』と表記する。」とのことであった。表記上は、この方が他の語との区別ができる長所があるからであろう。

この二重母音[ae]が[ai]に変化する現象は、全国各地に残っていて、熊本にはより濃密に残っているのである。

なお、蛙については、熊本県北部では、もっと古い古語である「タンギャク(タニグクの変形)」を使っている。

イ音便の使用

本物語には、「najiた成いた、tçubuiた漬いた、以下日本語表記のみにて、出いた、取り交わいた、

果いた、致いた、殺いた、汚いた、伏いた、戻いた、残いた、脅いた、隠いた、翻いて、尽くいて、許いて、読み現いて、渡いて、燃やいて、放いて、差いて、漏らいて、志いて、落といて、濁らいて、取り外いて、取り回いて、直いて、表わいて、起こいて、覚まいて、返いて、晒いて、流いて、行（ゆ）いた」のように、イ音便が多用されている。この中で「行いた」だけは、カ行のイ音便であるが、他は、全てサ行のイ音便である。

前述のように、筆者は昭和44年、天草の牛深市立牛深小学校教員として赴任した。この時、児童たちが、このイ音便を多用していたので、「標準語では、『イ』ではなくて『シ』と発音するのですよ。」と懸命に指導したことを覚えている。それでも、昨年牛深小学校の同窓会に招かれて出席したら、60歳になった教え子たちが依然として「先生、ご無沙汰致いた」とイ音便を使っていたのにはびっくりした。通常の指導では深く身に着いた発音は、そう簡単には変わらないことを痛感した次第である。

また、本物語では、canauaide（適わいで）の使用を認めることができる。これは、「カナワズシテ → カナワンデ → カナワイデ」と変化したものである。同様に、motaide持たいで、futeide捨ていで、vqeide受けいで、vôxerareide仰せられいで、以下日本語表記のみにて、顧いで、借らいで、取り捨ていで、弁えられいで、承引せいで、思い切らいで、及ばいで、ならいで、覚えいで、死せいで、知らいで、得いで、添えいで、見知らいで、及ばいで、加えいで、見えいで、足らいで、置かいで、使わいで、会わいで、溜めいで、差さいで、逃げいで、見付けいで、の語を認めることができた。

これは、否定の助動詞「ず」の連用形が撥音便を経てさらにイ音便化して用いられていたことを証明するものであるが、現在の熊本では、イ音便を逆に遡って、「～ンデ」と撥音便で発声していることは、誠に、興味深いことである。発音とは、このように「揺れる」ものなのである。

ウ音便の使用

本物語には、現在では、「笑った」と促音便で言うところを、「笑うた」とウ音便で言っている。他に「争うた、合うた、貰うた、歌うた、食らうた、買うて、言うて、煩うて、飼うて、雇うて、向かうて、嫌うて」と使われている。

これについて、先の4人に確かめたところ、現在、「ッ」の促音便が主流ではあるが、熊本においては「極く親しい間柄のくだけた会話の中では、ウ音便を使っている。」とのことであった。

一方、本物語では、「刻んだ」と撥音便で言うところも「刻うだ」とウ音便で言っている。このように「ン」の撥音便をウ音便で言っている語は、他に「運うだ、及うで、喜うで、呼うで、頼うで、臨うで、掴うで、挟うで、眩うで、飲うで」である。

これに関しては、語尾が元々「ぶ」の語は、現在も「ン」と撥音化して使い、ウ音便化しないが、語尾が「む」の語は、現在でもウ音便化して使っているのである。

このことについても、先の4人は、「その通り。」と答えてくれた。

さらに、本物語では、「良く」を「良う」のように形容詞の「く」をウ音便化して使っている。他

に、「無う、早う、重う、深う、近う、安う、遠う、強う、容易う、悲しゆ、久しゆ、詳しゆ、見苦しゆ、空しゆ」がある。この形容詞のウ音便化は、現在でも全国的に使われている発音である。

なお、本物語中には出てこないが、このウ音便が、古語の「いもひと」が「いもうと=妹」に、「やか」が「ようか=八日」、「かぐはし」が「かうばし=香ばし」、「ありがたし」が「ありがとう」等のように、すっかり現代語として定着していることも、ここに付記しておく。

助詞「ばし」の使用

本物語には、nanitoxita xifaidebaxi gozaruzo (何とした子細でばし御座るぞ)と「ばし」の表記がある。

この「ばし」は、文法的には副助詞で、係助詞「は」に副助詞「し」が付いたものが「ばし」と変化し一語化したものである。「ばし」の使用例として、室町時代の『太平記』⁵⁾の十に「やがて追うてばし寄せたらば、義貞爰にて討たれ給ふべかりしぞ」とある。(太平記には、熊本の豪族・菊池一族の大活躍の様が、数章に及んで記されている。)

この「ばし」は、本物語の刊行当時、熊本で使われていて、それがそのまま残り現在でも「ばし」を日常的に使っているのである。

例えば、「あたにばし言(い)よんね。」(あんたになんか言っははいない)「しきりばしするごつ。」(出来もしないくせに)と強調や仮定条件で用いられることが多い。

このように、気性が荒いと言われる熊本県人にとっては、この「ばし」は、必須の言葉であり、残るべくして残っている言葉である。

助詞「ば」の使用

この物語には、jucuxiuoba tabeta 熟柿をば食べた、nuruyuoba nomu 温湯をば飲む、vareni foreuoba touanu 我にそれをば問わぬ、guioy uoba yemajij 御意をば得まじい、のような助詞「をば」が、66回も用いられている。

『万葉集』⁶⁾ 巻第五雑歌に「我(あ)れをばも いかにかせよとか」とあるように、「をば」が、万葉集に数多く使われているし、小学校6年社会の教科書⁷⁾には、藤原道長(966年~1027年)が宴会の席で即興で詠んだとされる「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の かけたることも なしと思へば」にも「をば」を見ることができる。

この「をば」は、格助詞「を」に係助詞「は」の濁音「ば」が付いた連語で、動作や対象のものなどを、特に取り立てて強調する意図で用いる語の一つであるが、現代でもあえて「失礼をばいたしました(大変に失礼をいたしました)のように古風な言い方をして印象を強めるために使われることがあるが、現在の熊本では「をば」の「ば」だけを使い続けているのである。例えば、熊本人同士の日常的な会話では、標準語では「を」というところを、「水ば持ってきてはいよ(水を持ってきてください!))のように、「を」を「ば」と言っているのである。

この「ば」は、熊本で昭和初期に子供時代を過ごした木下順二作の『風浪』⁸⁾(熊本が舞台の西南戦争の話)の中に、「砂糖湯**ば**おあげしてきた」、「いつ迄でン何**ば**しょっとだろか」と「ば」を頻繁に使用している、同じく木下順二作『夕鶴・彦市ばなし』⁹⁾(熊本の八代の彦市とんち話)の中にも「隠れ**ば**着て剣術の稽古**ば**しょんなはる」、「珍しかも**ば**着とんなはるな」のように「を」と言うところは全て「ば」を使っている。

この例のように、昭和時代は、熊本では助詞「ば」を普通に使っていたのである。そして、令和の今でもくだけた間柄では高齢者から子どもに至るまで「お茶**ば**飲もう」(お茶を飲もう)のように、助詞「ば」を使い続けているのである。

日常会話で頻繁に使っていた助詞「ば」は、そう簡単には無くならないのである。

研究のまとめ

以上、天草版伊曾保物語の中に出てくる発音と熊本地方に残っている発音について比較・検討し言えることは、

- 1 室町時代以前に使われていた拗音「クワ」や「グワ」、それに「シェ」が、全国的には「カ」や「ガ」、それに「セ」へと直音化する中で、熊本では昭和の時代まで拗音が使われていたが、現在ではほとんど使われなくなっている。
- 2 1のように発音が変わっていった要因は、主に学校教育をはじめとした標準語化政策、ラジオ・テレビ等の言語メディアの影響、それに社会の変化に伴う人流の拡大等である。
- 3 一方、日常会話として親しまれている動詞下二段活用、イ音便・ウ音便、強調の助詞「ばし」、助詞「ば」は、根強く使い続けられている。
- 4 今後の研究課題として、濁音化現象や病目(やもめ)・母(はわ)・狼(おおかめ)・肉(ししむら)等の音の転換現象について調査・研究していきたい。

引用文献

- 1) 新潮社編(1976), 源氏物語【新潮日本古典集成源氏物語】(四常夏)P96L3, 新潮社.
- 2) 新潮社編(1978), 古今和歌集【新潮日本古典集成古今和歌集】(春)P50L5, 新潮社.
- 3) 秋山正次・吉岡泰夫(1991), 熊本の方言, P221L4, 熊本日日新聞社.
- 4) 文化庁(1961), 国語施策情報>第5期国語審議会>語形の「ゆれ」について(部会報告)[第2部会審議報告の別冊].
【https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/05/tosin04/index.html】文化庁.
- 5) 新潮社編(1988), 太平記【新潮日本古典集成五太平記】(十巻, 五巻)P106, 新潮社.
- 6) 新潮社編(1978)1, 万葉集【新潮日本古典集成萬葉集】(二 巻第五雑歌)P49L6, 新潮社.
- 7) 北 俊夫著作(2014), 教科書【新編新しい社会】(6上)P43, 東京書籍株式会社.

- 8) 木下順二 (1975), 風浪【木下順二作品集Ⅵ】(第6刷), 未来社.
- 9) 木下順二 (1974), 彦一とんち話 (33版), 新潮文庫.

参考文献

天草版伊曾保物語 (*Esopono Fabvlas*)【<https://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/amis/>】(1593年刊) 公開日2019年3月25日, 国立国語研究所.